慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ブルデュー社会学の認識論的前提 : カッシーラーとの対話を通して
Sub Title	
Author	平井, 正人(Hirai, Masahito)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2012
Jtitle	日本政治外交研究 No.6 (2012.) ,p.164- 183
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学日本政治外交研究会
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO92001005-00000006-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ブルデュー社会学の認識論的前提

——カッシーラーとの対話を通して——

総合政策学部四年　平井正人

序章
一、ブルデュー社会学の鍵概念
二、関係論的思考様式の一源流
三、ブルデュー理解の新しい視角
終章

序章

その黎明から今日に至るまで、社会学を含む社会科学は、物理学などの自然科学に見られるようなパラダイム、すなわち万人からの確固たる支持を得ることができる理論を確立するには至っていない。確かに、マートンとパーソンズを筆頭に一九五〇年代以降にアメリカで花開いた機能主義(functionalism)は、一時期には社会科学におけるパラダイムとしてみなされることもあった[一]。しかし機能主義への確固たる信頼がほとんど崩れ去った今日となっては、もはやパラダイムとしての地位を維持し続けているとはいいがたい[二]。機能主義の衰退後、基本的な立場を異にする諸潮流——社会システム論、シンボリック相互作用論、現象学的社会学、構造主義、批判的社会理論など——が乱立し、それぞれが競合し合っているのが現状である。

このような社会学、より広くは社会科学における諸潮流を歴史的に分析した富永健一は、その記念碑的な著作『現代の社会科学者』の中で、次のような三つの命題を提示している。まず、社会科学は富永が実証主義と理念主義とそれぞれ名付ける二つの潮流に分裂しているということ[三]。次いで、この分裂が生じたのは、社会科学が誕生した時の歴史的背景に起因するということ[四]。最後に、この分裂は社会科学の本性からして、今後も収斂することはないということ、以上の三つである[五]。

社会科学の本性に関する富永の診断が正しいとすれば、今後も社会科学は収斂することはありえず、分裂状態のまま存続していくことになる。しかし、富永の分析はあくまで歴史的な枠を超えるものではなく、論理的に社会科学の収斂が不可能であることを立証するものでは断じてない。いいかえれば、富永の分析はこれまでに存在した諸潮流が大きく二つの潮流に分断されてきたことを示すものではあっても、こうした歴史的分析だけでは、「現実的なものは理性的である」とでも認めぬ限り、将来にわたって社会科学の分裂状態が維持されることの根拠が示されたことにならない。

それゆえ、分裂状態にある社会科学を一つに収斂させようとするあらゆる試みは必ずや徒労に終わらざるを得ないとア・プリオリに断定することはできず、むしろ社会科学におけるパラダイムの創出可能性を探究する意

味で、この試みは非常に価値のあるものであるように思われる。

事実、近年になって、富永と同じように社会科学の分裂状態を問題視し、富永とは違ってその分裂状態を解消しようと努めた社会学者が複数存在する。私は、そのような社会学者の一人としてピエール・ブルデュー（一九三〇―二〇〇二）の名を挙げる[六]。富永が実証主義と理念主義と名付けたのと同様、ブルデューは社会科学の分裂した二つの陣営をそれぞれ主観主義と客観主義と名付けている[七]。

ブルデューが富永と袂を分かつのは、このような分裂状態が社会科学の進歩のためには乗り越えられなければならない障害であるとする立場を一貫して堅持している点においてである[八]。では、ブルデューはいかにして分裂状態にある社会科学の収斂を試みたのか。また、その試みはどこまで達成されたのか。そして、ブルデューの理論は社会科学におけるパラダイムとなりうるのか。このような問いは、ブルデュー研究者のみならず、社会科学に従事する全ての研究者にとって、強い関心を引く問題群である。

しかし、日本におけるブルデュー研究の議論を鑑みるに、未だ日本のブルデュー研究はなお道半ばにあり、まして、「紹介と概説の段階を超えて応用と批判的再構成の段階へと移行しつつある」状況からはほど遠いように思われる[九]。確かに、ブルデュー社会学それ自体の理解や平易な解説を目的とした著作や論文の多くは九〇年代に集中していたのに対し[一〇]、二〇〇〇年代になるとブルデュー社会学の理論の応用を企図した研究が増加傾向にあることが伺える[一一]。しかし近年になって、日本のブルデュー研究者の間では基本的な概念の理解においてさえ「曲解と誤読が目立ち、それ（ブルデューの社会理論）が理解されているとはいえない」として、日本におけるこれまでのブルデュー研究に対する厳しい批判が投げかけられている[一二]。ブルデュー社会学が初めて紹介されてから三〇年あまりが経過した今日においても、日本のブルデュー研究者の間では基幹的な理論の理解に関してさえ一致した見解が得られていない以上、日本におけるブルデュー研究は未だ発展途上にあるといわざるをえない。

このような議論の状況を踏まえ、ブルデュー理解における研究者間の一致した見解を創出するために、本稿においてはブルデュー社会学の忠実な理解のための基礎研究に貢献することを目的とする。その際に、既存のブルデュー研究の多くが取り組んできた、ブルデュー社会学の基礎概念を今改めて検討することは企図していない。本稿の意図は、ブルデューが自らの社会学にとって本質的であるとみなしていながら、ブルデューのみならず、ブルデュー研究者も明示的に解明しようとはしてこなかった認識論的前提の一端に光を当てることである。いいかえれば、これまでのブルデュー研究が見過ごしてきた論点があることを指摘し、その重要性を論証し、その問いに対する回答を暫定的に与えることが本稿の目的である。

第一章では、関係論的思考様式（le mode de pensée relationnel）がブルデュ

ー社会学の前提とする科学哲学であるが、ブルデュー自身はそれを明確に説明しなかった上に、既存のブルデュー研究によっても十二分に考察されてこなかったことを確認する。第二章では、この思考様式の源流の一つであると考えられるエルンスト・カッシーラー（一八七四―一九四五）の『実体概念と関数概念』を主として参照しながら、関係論的思考様式の特性を明らかにする。第三章では、関係論的思考様式についての予備知識を得ることで、ブルデュー社会学が新たな相貌で浮かび上がってくる可能性を示唆する。

一、ブルデュー社会学の鍵概念

（1）語られざる前提――関係論的な科学哲学

ブルデュー社会学は難解と評されることが多い。その理由を、ある者はブルデューによる文章の晦渋さに帰し[一三]、別の者はブルデューが依拠する資料の膨大さに帰している[一四]。だが、それだけではなく、ブルデュー社会学が半ば暗黙のうちに依拠している認識論的前提が十二分に説明されてこなかったことにも着目すべきである。なぜなら、語られざる前提もまた、ブルデュー理解を妨げる障害となりうるからである。

その証左となる見解を、ブルデューは『実践理性』の冒頭で明らかにしている。それによれば、フランス国外で講演する機会を得たことで、ブルデューは自らの社会学にとって「本質的だと思われるもの」へ至ることができたという[一五]。それは、ブルデューを理解しようと努める好意的な読者からさえも――理解しようとせずに頭から批判してかかろうとする敵対的な者は言わずもがな――しばしば見落とされてきたものであり、その責任の一端はおそらくブルデュー自身にもあるのだと述べている[一六]。

> わたしの仕事の本質的、基礎的、根本的な要素と言ったが、その第一は、様々な関係を重視するという意味で関係論的と称しうる科学哲学である[一七]。

ここには、ブルデュー社会学における「本質的、基礎的、根本的な要素」の一つが、「関係論的と称しうる科学哲学」であることがはっきりと述べられている。このことが「善意ある読者や評者からさえもなかなか理解してもらえなかった」原因の一端は――それこそブルデューが自らの責任と認めていることなのであろうが――、一九九四年に『実践理性』が出版されるまでの間、ブルデューがこの事実を説明してこなかったことにあると考えられる[一八]。

読者の大部分が、ブルデュー社会学が科学哲学に依拠していることを見過ごしてしまったのは、ブルデューがある意味で極めて特異な社会学者であることを鑑みると、避けがたいことであったといわざるをえない。ブルデューは初めから社会学者を志していたわけではなく、哲学専攻の学生だった[一九]。とりわけ、厳密さに欠けるサルトルの実存主義に反感を覚えたブルデューは、哲学史、科学史、科学哲学へと向かったことを後に述懐して

いる[二〇]。通常の社会学者にとって、科学史や科学哲学への通暁が一般的なことではない以上、彼らがブルデューの前提とするものを見過ごしてしまっていても不思議はない[二一]。

(2) ブルデュー自身による説明

ブルデュー社会学において、「関係論的と称しうる科学哲学」がその本質的な部分を占めていることが明らかになった。次なる問題は、この科学哲学の特性とは何であるか、また、ブルデュー自身はその説明を行なっているかどうかである。もしそのような説明がなされていないとすれば、多くの読者にとって、ブルデュー社会学の本質を見落とす危険を回避することが困難となり、結果として誤読しかねない。そこで、ブルデューが「関係論的と称しうる科学哲学」をどのように論じてきたかを検討する必要がある。

ところが、先に参照した『実践理性』の冒頭を除くと、「関係論的と称しうる科学哲学 (une philosophie de la science que l'on peut dire *relationnelle*)」という表現は見つからず、代わりに散見されるのは「関係論的思考様式 (le mode de pensée relationnel)」と「実体論的思考様式 (le mode de pensée substantialiste)」という対概念である[二二]。「関係論的 (relationnel)」という形容詞の一致を考えると、これがその科学哲学を言い換えたものとみなして良いと思われる。

しかし、関係論的思考様式に関する記述の大部分は、何らかの社会学的な主題を扱う著作の途中で、思い出したかのように簡単に触れる程度の言及にとどまっている。一九九四年の『実践理性』より前の著作では、一九七〇年の『再生産』のほか、一九八九年の『構造と実践』、一九九二年の『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』にも複数箇所で関係論的思考様式という概念の記述を見出すことができる。その記述内容は、以下の六点にまとめることができる。

第一に、関係論的思考様式とは、数学や物理学に代表される先進的な近代科学に特徴的な思考様式であり、特にカッシーラーが『実体概念と関数概念』によって明らかにしたものである[二三]。その基本的な特徴は、実体ではなく関係に重きを置くことである[二四]。

第二に、数学や近代物理学の基礎である関係論的思考様式は、言語や神話、宗教、芸術といった象徴体系を考察対象とする構造主義によって社会科学にも拡張された[二五]。しかし、ブルデューは構造主義と関係論的思考様式を完全な同義語としては用いてはおらず、前者をより狭い意味で捉えている[二六]。

第三に、関係論的思考様式は、個々の要素を、それらを包含するところのシステムの中にある関係を形成する部分として捉えることによって、その意味と機能が明らかになるとする[二七]。逆にいえば、個々の要素をシステムから切り離して独立に考察してしまうと、個々の要素が持つ意味と機能

が見えなくなってしまう。

第四に、関係論的思考様式は「現実」を見ることも触れることもできない抽象的な関係として捉え、それは科学的な作業によって構築されるものとする[二八]。それに対して、実体論的思考様式は現実を個人や集団のように直観によって知ることのできる実体として捉える[二九]。

第五に、実体論的思考様式（le mode de pensée substantialite）は、関係論的思考様式とともにカッシーラーによって名付けられたもので、直観によって我々に与えられる実体を対象とする。実体論的（substantialiste）という形容詞は、しばしば「通常の（ordinaire）」や「現実主義的な（realiste）」、「実証主義的な（positiviste）」などに置き換えられる[三〇]。

第六に、ブルデュー独自の界（champ）概念は、関係論的思考様式の理念を概念に反映させたものである[三一]。ニュートンの万有引力の法則や重力場の理論のように、直接的な相互作用に還元されてしまいがちな客観的構造ないしは遠隔作用が存在しうることを思い起こさせる役割を持っている[三二]。

以上を鑑みるに、少なくともまとまった著作の中においては、ブルデューは関係論的思考様式それ自体の論究を必要十分には行っていないと結論づけることができる。あらゆる近代科学に共通する思考様式や、カッシーラーが導入した区別といった記述は関係論的思考様式の付帯的な特徴だけしか表していないからである。それゆえ、ブルデューのテクストだけにとどまっているのでは、「関係論的思考様式とは何か」という問いに対する答えは得られないことがわかった。

（3）先行研究の検討

では、日本におけるブルデュー研究は、ブルデューが明快な回答を示さなかった問いを検討しているだろうか。実際のところ、大部分の先行研究は「関係論的と称する科学哲学」や「関係論的思考様式」という表現はおろか、「実体論的（substantialiste）」と「関係〔論〕的（relationnel）」というブルデューの決まり文句さえ、考察のなかに見受けられないものがほとんどである。特に研究が初期のものになればなるほど、実体論と関係論の対概念に全く言及することなく、文化資本・ハビトゥス・界（場）といったブルデュー独自の概念に関する解説、注釈、そして批判に終始してしまっている。例えば、一九九三年に出版された『差異と欲望――ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む』では、関係論的思考様式という言葉は明示的には現れていない。

とはいえ、関係論的思考様式に関して言及している先行研究が日本にまったく存在しないわけではない。一九九八年の『ブルデュー社会学を読む――社会的行為のリアリティーと主体性の復権』がその代表的な事例である。同書はその序論において、「ブルデュー社会学を理解するには、彼の科学認識論を理解することが不可欠である」と明言している[三三]。さらに、「ブルデュー社会学の基本的特質」の一つとして、「その方法論的特質は『実体

論的思考様式』から『関係論的思考様式』への方法論的転換を主張している点にある」と述べており、他の箇所でも繰り返し関係論的思考様式という表現を用いている[三四]。

しかし、本書は関係論的思考様式と実体論的思考様式という対概念を用いるだけで満足してしまっている。すなわち、「ブルデュー社会学の方法論が『関係論的思考様式』にある」ということを繰り返し述べるにとどまり、「関係論的思考様式とは何か」を問うことはしなかったのである。いいかえれば安田は、ブルデューがそうしているのと同様に、関係論的思考様式をいわば自明の理として扱ってしまっている。

他の論稿に視野を広げても、同様の問題を見出すことができる。「反省的社会学の生成――ブルデュー社会学における認識論の位置づけをめぐって」と題する論文のなかで、三浦はブルデューの著作を中心に参照しながら、その認識論の分析を行っている。しかし、「ブルデューは（中略）理論と経験の間の関係を逆転した関係的思考様式を導入するのである。（中略）関係的思考様式を通じた認識論的切断（中略）」とまで述べておきながら、安田と同様に、それが「何であるか」を究明しておらず、参照している『社会学者のメチエ』をパラフレーズするにとどまっている[三五]。

磯の「ブルデューの『階級』分析」論文の場合でも、「このような空間の捉え方は、彼の関係論的思考を忠実に表したものといえよう」という箇所や[三六]、「方法的には、関係論的思考の上に質的調査と量的調査を組み合わせた手法を採っている」という箇所で、「関係論的思考」という表現が見受けられる[三七]。また、「『再生産』以後のブルデュー――一九七〇年代における三つの基礎概念の形成」においても、「資本概念を理念型的に類型化するか、それとも界概念と共に関係論的に規定するか、という点である」という一節において、「関係論」という概念を用いている[三八]。

しかし、いずれの用法においても「（他と）関係づける」といった程度の意味でしか関係論的思考様式という概念が捉えられていないと指摘することができる。つまり、「関係を重視するのが関係論的思考である」といった程度の、同語反復（トートロジー）的な意味しか与えられていないのである。

ブルデュー自身が説明を与えておらず、先行研究によっても解明されていないとすれば、関係論的思考様式という概念を理解するためには、その源流へと立ち戻らなければならないことになる。すなわち、ブルデューが学んだ科学哲学の原典を直接参照することで、関係論的思考様式とは何かを問わねばならない。そのようにして関係論的思考様式とは何かの一端を掴んではじめて、ブルデュー社会学におけるこれまで見えなかった部分が我々の眼前に浮かび上がってくるはずである。

二、関係論的思考様式の一源流

（1）アリストテレス論理学の変容

関係論的思考様式とは何かを考察するに当たって、ブルデューはいくつかの道標を残している。すでに触れたように、ブルデューによれば、関係論的思考様式とはカッシーラーが『実体概念と関数概念』（以下、『実体と関数』）の中で、数学や物理学といった近代科学の発展を歴史的に検討することを通して明確化した思考様式である。

もちろん、カッシーラーだけがブルデューの依拠する科学史・科学哲学研究者ではなく、関係論的思考様式がカッシーラー独自の着想だと断定することはできない。とはいえ、ブルデューが関係論的思考様式について言及する際にかなりの頻度でカッシーラーの名を挙げている事実を考えると、カッシーラーがこの思考様式の一源流であると考えてよさそうである。したがって、本稿では関係論的思考様式について論じた科学史・科学哲学研究の一例としてカッシーラーを扱うことにしたい。

『実体と関数』を紐解いてみると、ブルデューが関係論的思考様式と実体論的思考様式とそれぞれ呼ぶ対概念は用いられていないことがわかる[三九]。カッシーラーが用いているのは、表題の通り実体概念と関数概念、あるいは事物概念と関係概念という対概念である[四〇]。そこで、カッシーラーが実体概念と関数概念と呼ぶものを、ブルデューの実体論的思考様式と関係論的思考様式に対応するものとみなし、それぞれの特徴を明らかにすることを本章の目的としたい。

では、実体概念と関数概念それぞれの特徴を検討する前に、まずは『実体と関数』が書かれたところの目的を説明する必要がある。カッシーラーは、同書の「まえがき」で次のように述べている。

> 概念についての伝統的な論理学の学説は、そのよく知られた基本的特性においては、数学の原理論がもたらす問題を単に遺漏なく〈言い表すこと〉さえおぼつかないことが判明したのである[四一]。

伝統的な論理学とは、アリストテレスによって確立された古代形式論理学を表している。いわゆる新カント主義に列するカッシーラーが多くを負っている『純粋理性批判』においても、「論理学がこの確実な途をすでにもっとも古い時代から歩んできたことは、アリストテレスいらい一歩も後退する必要がなかったことからも見てとられよう」と記されているように、一九世紀後半に現代の数理論理学が確立されるまでは、アリストテレス論理学が揺らぐことのない確実な学と見なされていたようである[四二]。この事実は、論理学史家のボヘンスキーも認めるところである。

> 現代における論理学史は一九世紀の間にすでにはじめられていたが、この時期における論理学史の状態は、二つの現象のために――実際ほぼ一九三〇年位までは――きわめて悪かった。その一つは、たいていの論理学史家が、カントが論理学について述べたことを受け入れたことである[四三]。

なぜ論理学が問題となるのだろうか。それは、論理学が思惟の形式一般

を扱う学であるため、学問を含むあらゆる思惟に関わってくるからである。再び『純粋理性批判』を参照してみよう。カントによれば、悟性とは「概念を生み出す自発性」であり、論理学とは「悟性の規則一般の学」である[四四]。すなわち、概念を生み出す人間の能力一般を問題とするのが論理学だということになる。

そして「認識のすべての客観〔対象〕とその区別を切りすてる権利をもち、むしろ義務づけられている」論理学にあっては、「悟性はじぶん自身とじぶんの形式以外にかかわる必要がない」がゆえに、「論理学はまた予備学として、いわば学の前庭をかたちづくる」ことになる[四五]。もちろん数学や物理学を含むあらゆる学問には概念が必要とされるのであるから、論理学は全ての学問の基礎を成していることになる。

しかし、カッシーラーによれば、伝統的な論理学ではカッシーラーが生きた一九世紀後半に通用していた数学の概念を説明することができなかったようである。さらに、この問題は数学ばかりにとどまらず、「数学から精密科学の全体へと押し広がってゆくものである」とも主張されている[四六]。そこで、伝統的な論理学ではその形成を説明することができなかった数学や精密科学の諸概念を検討することを通して、「〈形式論理学〉の基幹理論がそこで被った変化」を調べることで、伝統的な論理学に対する新しい論理学の特性を明らかにすることが『実体と関数』の目標となる[四七]。そして、伝統的な論理学に基づいて産出される概念を事物概念、新しい論理学に依拠する数学や精密科学における概念を関係概念と区別し、それぞれが「〈論理学の典型的な二つの基本形式〉」であるとされる[四八]。この二つの基本形式は、「実体概念の観点に縛られている類概念の論理学」と「数学的関数概念の論理学」として定式化される[四九]。

論理学が思惟の形式に関する学問であるならば、それが思考の様式であることから考えても、関係論的思考様式が「数学的関数概念の論理学」に対応し、実体論的思考様式が「類概念の論理学」に対応すると考えられる。

(2) 二つの論理学とその性質

では、「類概念の論理学」からみていこう。すでに述べたように、類概念の論理学とはすなわち、アリストテレス論理学のことである。アリストテレス論理学における概念形成の理論は、類概念の理論と呼ばれるものである。その特徴を三つの観点から整理したい。第一に、どのようにして概念が生み出されると考えているか、すなわち概念形成の理論について確認する。第二に、その理論によって生み出された概念における普遍と特殊の関係を取り上げる。第三に、類概念の論理学においては、「現実」というものがどのように捉えられているかを示す。

第一に、概念形成の理論である。類概念の論理学を基礎とする事物概念は、「見通しきれないくらい多種多様な相にある事物そのものの現存、およびこれら個々別々の充溢の中からそれらの多くに〈共通に〉属する要素を

取り出す精神の能力」によって、「同一の性質を共通に持つことで特徴づけられる対象をわれわれがひとつの部類にまとめあげ、さらに、この手続きをより高い水準にまで繰り返す」ことで形成される[五〇]。すなわち、類概念の論理学は概念を、我々の外に存在する現実を「抽象」し、「模写」したものであると考える。

第二に、普遍と特殊の関係である。このような過程を経て形成された諸概念は、その特殊性と普遍性の等級に応じた「概念ピラミッド」を構築する。そこにおいては、「ある概念の徴標の個数をその〈内包〉の量とするならば、高位の概念からより低位の概念に下がれば下がるほど、その量は増加し」、反対に「より高位の類に昇ることによってこの〔下属する種の〕個数が増加すれば、それに応じてこの内包の量は減少する」という性質が示される[五一]。したがって、普遍的な概念を得るためには、特殊的な概念の内包を消去すればよく[五二]、最後にはいかなる内包も持たない「あるもの(etwas/something)」に到達する[五三]。

第三に、現実の問題である。類概念の論理学は、「現存する所与の諸実体に即してしか、多様な存在の規定を考えることができず、もともと存在するにちがいない確かな事物的基体に即してのみ、存在一般の論理学的・文法的種がその実在上の手懸りと根拠とを見出すことができる」と見なす[五四]。我々の外部に存在する一切のものであるところの現実は、目的論的な秩序によって満たされており、それゆえに現実の模写である概念にも秩序が生まれることになる[五五]。

カッシーラーが異議を申し立てるのは、この類概念の理論によって数学や自然科学の概念も形成されているとする説に対してである。

ここで展開された概念の理論は、具体的な〈科学〉において行われている手続きを充分かつ忠実に描き出しているだろうか？　それは、この〔科学的〕手続きの個々の特徴を残らず含み支配しているだろうか？　それはその〔手続きの〕特徴の個々の特殊性や連関を表すことができるだろうか？　少なくともアリストテレスの理論では、このような質問は否定的な回答をうけとるはずである[五六]。

彼によれば、数学の概念を調べてみると、それは類概念の理論とは別の概念形成の理論にのっとって構築されていることが明らかになる。その理論は、「数学的関数概念の論理学」と呼ばれるものである。その特性を先と同様に三つの視点から整理する。

第一に、概念形成の理論である。概念とは、我々が能動的に、すなわち自由な能作によって、頭の中で仮説演繹的に構成した観念的かつ常住不変な諸関係のシステムである[五七]。それゆえ、この諸関係の体系は、模写すべき何らかの実体、事物、基体を必要としない、純然たる自発的な能作によって産出される[五八]。その関係のシステムは、一定の規則、法則、原理がその全体系列を支配されている[五九]。

第二に、普遍と特殊の関係である。類概念の論理学においては、普遍と特殊は両立しがたいものであった。しかし数学的関数概念の論理学にあっては、個々別々の特殊的なるものは、それらをある一定の規則、法則、原理にのっとって配列するところの可能的なるものの全体系列に内包される[六〇]。また、ある時点で諸々の特殊を包括するものとみなされる系列も、それをも包括するところのより上位の系列に包括される可能性を常に残している[六一]。特殊が具体の中に含まれるということは、パラメータ、すなわち変数という発想を用いるということである。我々は変数に対して任意の値を代入することができるが、代入されるまでは可能な代入値のすべてを表していると見なす。それゆえ、変数は代入され得るすべての値を可能性として含んでいるから、普遍的でありながら特殊的でもありうるのである[六二]。

第三に、特殊的なるものの個別項は、同じく全体系列の中に位置づけられる他項との関係に位置づけられてはじめて〈存在〉し、その意味と機能を持つと見なされる[六三]。それゆえ、存在するのは論理的現実であり、感覚的現実とは区別される[六四]。また、裸の事実というものは存在せず、特殊項は概念的な変形を被っている[六五]。

以上見てきたように、類概念の論理学と数学的関数概念の論理学とは、いくつかの本質的な点でその基本的性格を異にしていることがわかる。

(3) 数学的関数概念の論理学と経験科学

以上が数学的関数概念の論理学における一般的特徴であり、すなわちブルデューが関係論的思考様式と呼ぶものの一般的特徴でもあると考えられる。しかし、すでに触れたように、論理学それ自体は「認識のすべての客観〔対象〕とその区別を切りすてる権利」を持つ〔カント的な意味で〕純粋(pure)な学にとどまっている。それゆえ、カッシーラーが向かった次なる問題は、数学的関数概念の論理学が、数学や幾何学といったア・プリオリな学の領域を超えて、物理学や化学といった経験科学にも適用可能かどうかである。

経験科学が我々の外部に生起する現象、存在、実体を扱う以上、「数学的概念には、論理学の問題の全分野にまたがる例として、〈概念一般〉の性質の範型として役立つための本質的契機が欠けているように思われる」とカッシーラーは述べている[六六]。しかし、カッシーラーの議論に従えば、経験科学においても同様の論理学的な転換が見られるという。やはり、先と同様の三つの観点から考察してみることにしよう。

第一に、概念形成の理論であるが、自然科学が対象を記述するためには、対象を数学化することなしには不可能である。「総じて最初の一歩は、感性的で無規定なもの、そのままでは捉えられず確かな境界に閉じられていないものを、度と数によって制御可能なものに、ある〈量的に規定されるもの〉に変換することにある[六七]」。『実体と関数』の後に公刊された『アインシュタインの相対性理論』においては、「計量概念」という名前で定式化さ

れている。

概念のなかにあるものは、明らかに、単純な事物や感覚内容の複製ではなくして、単に感覚がとらえうるものから、ある測定可能なものに、そしてそれによって「物理学の対象」に、言いかえれば物理学に〈とっての〉対象に変換することを意図した、理論的な措定と構成なのである。〈人が測定することの可能な〉すべてのものは存在するという、法則として総括された物理学的客観性の基準のプランクによる巧みな定式化は、物理学の観点からは充分に満足のゆくもののようである。[六八]

第二に、普遍と特殊の関係である。カッシーラーによれば、物理学においても、数学的関数概念の論理学の特徴が維持されているという。概念形成の理論で述べたように、物理学者は感覚的現実を数学的シンボルに置き換える。そして、このシンボルが数学的である以上、数学と同様の論理にしたがって、それは一つの系列を構成する。この普遍的な系列には、変数としてあらゆる〈可能な〉特殊が含まれていることになる。[六九]

第三に、現実の問題である。厳密に制御された実験や観察を行なうとはいっても、物理学が扱うのはやはり論理的現実であって、感覚的多様そのものではない。[七〇] 等速直線運動や「理想」気体のように、現実にはありえないが、ある特性を極限に近づけた純粋に理念的な概念を創造することで、観察された感覚的現実を理解するための論理的モデルとするのである。[七一]

以上、カッシーラーの議論を整理することを通して、関係論的思考様式への手懸りを探ってきた。その結果、カッシーラーが「数学的関数概念の論理学」と呼ぶものがその相関物に相当することが明らかとなった。次章では、「数学的関数概念の論理学」の特性を踏まえることで、ブルデュー社会学が異なった様相で浮かび上がってくることを示したい。

三、ブルデュー理解の新しい視角

(1) 社会学的知識の理論、メタ科学の原理

これまでの議論で、二つのことが明らかになった。第一に、ブルデュー社会学の基礎である関係論的思考様式についてブルデュー自身も、これまでのブルデュー研究も明らかにしてこなかった。第二に、ブルデューがたびたび名前を挙げているカッシーラーの『実体概念と関数概念』を参照すると、関係論的思考様式の源流と見られる思想の特徴が垣間見えてくるということである。以上を踏まえて、本章ではカッシーラーの『実体概念と関数概念』の議論を前提にブルデューを読み直すことで、ブルデューの議論がそれまでとは違った姿で浮かび上がってくることを示す。

カッシーラー読解を前提とすることで明らかになる点の第一は、ブルデューが社会学的知識の理論（The theory of sociological knowledge）と呼ぶものに、関係論的思考様式が含まれているということである。[七二] 社会学的知識の理論という概念が登場するのは、『再生産』や『社会学者のメチエ』（以

下、『メチエ』)、「構造主義と社会学的知識の理論」(以下、「構造主義」論文)などである。

しかし、ブルデューはこの社会学的知識の理論が何であるかをはっきりと説明していない。『再生産』の中では象徴的な力(force symbolique)が存在することを、社会学的知識の理論の一原理とみなすことができると述べるにとどめており、社会学的知識の理論一般が何であるのかを突き詰めて論究してはいない[七三]。

また、『メチエ』においては複数箇所で言明されているものの、そこでは社会学的知識の理論(la théorie de la connaissance sociologique)が、社会システムの理論(la théorie du système social)と区別されなければならず、後者が社会についての個別理論であるのに対して、前者がそうした個別理論を産出することを可能ならしめる原理の体系、すなわちメタ科学の理論であることを指摘しているのみであって、その原理とは何であるかを体系的に論じてはいないのである[七四]。

さらに、『メチエ』と同年に公にされた「構造主義」論文においても、社会学的知識の理論と社会システムの理論という、同様の対概念を見出すことができる[七五]。「構造主義」論文では、『メチエ』の記述に加えて、社会学的知識の理論とはある種のメタ科学の原理であり、それは、人間の科学(the science of man)を含む、すべての科学が依拠する諸原理の同一性を保証するであることが述べられている[七六]。

やはりここでも、社会学的知識の理論がどういった原理によって構築されているのか、その体系的な考察は行なわれていないように思われる。メタ科学の原理である社会学的知識の理論と、個別の社会システムの理論を区別したのちに、人類学における構造主義がもたらした功績の一つに、近代数学と近代物理学が駆逐してきた実体論的思考様式を排斥してきたことを挙げている[七七]。ここでは、「厳密な意味での幾何学的認識は、個別の対象が孤立した対象として与えられるところにではなく、これらの対象の〈全体性〉の構成的産出を可能にする手続きが与えられるところにのみ、存在する」という、カッシーラーの『実体概念と関数概念』における議論とまったく同様に[七八]、近代幾何学においては幾何学的形象を現実的存在としてではなく、形象相互の関係によって把握してきたことを述べている[七九]。

その後の議論においても、数学や物理学が被ってきた変化、すなわち実体論的思考様式から関係論的思考様式への変化を参照しながら、構造主義がそれと同様の方向へと社会科学に変革をもたらしたことを述べている。つまりブルデューが社会学的知識の理論と呼ぶ概念の中に関係論的思考様式の諸特徴が含まれているといってよいであろう。そして、この事実はカッシーラーが行なった実体概念と関数概念に関する議論を前提としていなければ、窺い知ることが困難であったはずである。

「構造主義」論文と『実体概念と関数概念』の議論がつながったことで、直接カッシーラーが参照されていなかった『メチエ』の議論とも、関係論

的思考様式が関わってくることが明らかとなる。『メチエ』では関係論的思考様式という表現は一度も現れていないため、表面的にはそれとは関わりのない議論が行なわれているように読み取られてしまいかねない。しかしながら、カッシーラーの議論を把握し、「構造主義」論文の議論と平行して『メチエ』を読むことで、実は『メチエ』の中にも関係論的思考様式に関わる議論が数多く行なわれていることが明らかになってくる。

(2) 法則の概念的な先取り

『メチエ』の中には、「命題の体系と体系的論証」と題した一節の中に、方法的循環（cercle méthodique）あるいは循環論法（cercle vicieux）という記述がある。ブルデューが『メチエ』の中で述べる論証の方法は、事実の集積から理論へと向かう実証主義的な方法とは真っ向から対立する、関係の体系を構築する理論をあらかじめもっていてはじめて、観察される個々の事実が価値を持つとみなす。類似の議論は、『メチエ』の他にも「構造主義」論文やパノフスキーの『ゴシック建築とスコラ学』の仏語翻訳に付されたブルデューの「あとがき」にも見出せる[八〇]。一見すると論点先取（pétitions de principe）、あるいは循環論法の誤りを犯しているように解釈されてしまいかねないこの方法も、カッシーラーの議論に通暁していれば、妥当であると理解できる。

まずはこの方法がブルデューの研究において用いられている事例を確認してみよう。もっとも明瞭に現れているのはおそらく『ディスタンクシオン』であり、その「方法についてのいくつかの考察」でかかる方法を採用した理由が説明されている。

> こうした〔もし全部一遍に差し出されていたらおそらく恣意的な、あるいは不自然なものと映ったにちがいない理論的〕仮説の総体は、もしそれが研究の最初の段階から発見に役立つ図式という形で存在していなかったなら、分析資料から抽出することなど決してできなかったにちがいないのであって、このことを知らずにいるわけには（また知らせずに済ますわけにも）いかなかった。研究の到達点を出発点とみなすような記述形式は（中略）個々の事実が自らの真理値を受け取る母体である諸関係のシステムの中に、それらの事実をおき直してやることを可能にする唯一のものとして、浮かび上がってきたのである[八一]。

この発想は、まさにカッシーラーが『実体と関数』の中で述べている、「法則の概念的な先取り」と主想を共にするものである。カッシーラーの議論においては、数学的概念において典型的に見られるように、概念とは思惟が能動的に産出するものであって、実体概念が前提とするように、個々の観察によって一つひとつの概念が確認されることによって産出されるのではない。物理学においては、まず概念があり、それに基づいて事実が与え

られうる。

法則が測定から生じうるのは、もっぱらわれわれが法則を仮説的な形式でその測定そのものに置き入れたことの結果なのである。この相互関係がいかに逆説的に見えようとも、それは物理学の論理的問題の核心を忠実に示している。法則の概念的な先取りは、独断論的な〈断言〉の形式においてではなく、単に最初の思考上の端緒として行なわれるのであるから、矛盾してはいない。つまりこの先取りは、最終的な回答を含むものではなく、単なる設問を含んでいるにすぎないのである。この端緒にもとづいて経験の全体が首尾よく隙間ない統一に統合されてはじめて、その価値と権利とが示される。（中略）われわれは、もっぱら概念を可能な経験の全体を考慮することによって構想するのと同様に、「事実」をも、概念の〈全体〉によってのみ所有しているのである[八二]。

それゆえ、ブルデューが取った方法は、カッシーラーが分析した近代物理学のものと同じものであるとみなすことができる。それによれば、我々の「外に」あらかじめ裸の事実が存在しており、それを可能なかぎりそのままの姿で写し取ることによって、概念や法則というものが作られているのではない。そうではなく、事実を事実として受け取るためには、あらかじめ概念が確立されていなければならず、その概念の中に位置づけられることで、事実は事実として捉えられるのである。ゆえに、概念を仮説的に先取りすることは、循環論法といった論理的な矛盾として理解されてはならない。ブルデュー社会学を理解する上で、この方法論上の前提を理解しておくことは重要であるが、この前提もまたカッシーラーによって定立された関係論的思考様式へと通じているのである。

（3）アナロジーという方法

次に問題とすべきは、方法としてのアナロジーである。ブルデューが『メチエ』において、やはりパノフスキーに依拠しながら、アナロジーの方法的な重要性を指摘している以上、ブルデュー社会学の方法を検討する上で、アナロジーの問題を避けて通ることはできない。そしてこのアナロジーにおいても、その根底には関係論的思考様式が流れているのである。

まず、アナロジーは「類似」ないしは「類推」と訳される。『メチエ』では「たんなる類似（ressemblance）とアナロジー（analogie）とは異なる」と明言されており[八三]、表面的な類似性によってではなく、その背後に隠された原理（principes cachés）を捉えようとするのがアナロジーであると述べられている[八四]。

次に、アナロジーに基づく推論は、比較法（la *démarche comparative*）によって基礎づけられている[八五]。ヴェーバーが構築した理念型は、「純粋な模範から現実がどれだけ逸脱しているか、その距離を客観的に測定すること

によって、現実の行動を客観化することを可能ならしめる」ことを目的としたものである[八六]。その意味で、理念型は現実からのアナロジーによって構築された理論的な虚構である。

しかしブルデューは、ヴェーバーが「理念型とモデルを同一視することによって、理念型を典型的なケースとみなしたこともあれば、極限ケースになぞらえたこともあった」として、曖昧さを残しているという批判を行なっている[八七]。そうした曖昧さを防ぐために、ブルデューはヴェーバーの理念型を関係論的に解釈し直すことで、解決を図っている。

これらの曖昧さを回避するために、とりわけ現に観察可能な事実を扱う際に、

（中略）むしろ可能なるものの一特殊事例として、諸変換のグループにおける一要素として、考察されなければならない。それは、その特殊事例を全ての可能な、あるいは現実の集合に属する諸事例、その中に理念型が特別な事例であるところの諸事例の集合を参照することによって考察されなければならないのである。そしてそれゆえ、その理念型を同形の諸事例の構造を明らかにするものとしてみなさなければならない[八八]。

同様の考え方は、カッシーラーが考察した物理学の中にも見出すことができる。

いかなる自然科学の〈理論〉も、これらの事実そのものに直接関連しているのではなく、われわれが頭のなかでそれらの事実と置き換える観念的な〈極限〉に関連しているのである。われわれは、相互に作用を及ぼす質量を〈完全〉弾性体ないしは非弾性体とみなすことによって物体の衝突を研究し、完全流体の概念を把握することによって流体中の圧力の伝播の法則を確立する。また「理想」気体から出発し、したがって直接感覚されるデータにいわば仮説的に考え出された〈モデル〉を対置することによって、気体の圧力と温度と体積の関係を吟味する[八九]。

このように、アナロジーによる推論は、現実に観察されたものを思惟によって創造されたものに置き換えることによって、すなわち、事実（あるいは現象）の領域で観察されたものを思惟（あるいはシンボル）の領域に置き直すことによって、純粋に思惟の産物であるモデルを構築する[九〇]。そのモデルと、現実の観察結果とが比較されることによって、そのモデルの妥当性が検証されるのであって、その妥当性は事実の領域で観察される諸関係と、思惟の領域で構築されるモデルとの間の構造的な相同性が存在するかどうかが問題となるのである[九一]。

この着想を理解していれば、ブルデューがフローベールやプルーストを社会学研究の中で言及することが多い理由を理解できるように思われる。プルーストを貴族に関する最も偉大な社会学者の一人だと言っているように[九二]、ブルデューは『失われた時を求めて』といった小説の中の一節を引

用することが少なくない。通常の社会科学者であれば、フィクションの世界のことがらでもって現実を語るなど、その研究の科学性を削ぎ落とす行為以外の何ものでもないように思われるはずである。

しかし、これまで考察してきたアナロジーの考え方にのっとれば、ブルデューはプルーストが描写する世界を「可能なるものの中の一特殊事例」として位置づけ、思惟の領域に属する可能な世界像の一つとしてみなしているわけである。たとえプルーストが『失われた時を求めて』の世界を実在しない世界として創造したのであったとしても、その世界が観察可能な現実世界と同じ構造を持っていれば、それはヴェーバーの理念型と同じく、科学的な議論の中で用いられる権利を有していることになる。そして観察可能な領域を超えて、可能性の領域にまで思考を広げることを可能ならしめるというのは、関係論的思考様式における重要な特徴の一つである。

終章

本稿では、カッシーラーが『実体概念と関数概念』の中で行なった議論を踏まえて、ブルデュー社会学を解釈することを試みた。それというのも、カッシーラー理解を下敷きにすることで、ブルデュー社会学の基礎を形作る哲学である関係論的思考様式の一般的な特徴を理解することができると推察されたからである。カッシーラーの読解を前提にブルデューを読み直すことで、ブルデューが暗黙のままにしていた語られざる前提の一端に光を当てることができるということを示すことができたのではないかと思われる。

しかし、本稿で関係論的思考様式の全てを明らかにできたわけではない。関係論的思考様式とはカッシーラーに独自の思想ではなく、バシュラールやデュエムなど、多くの科学哲学者が共通して述べている思想であって、カッシーラーの思想はその一事例にすぎないからである。関係論的思考様式とは何かを明らかにするためには、カッシーラーのみならず、ブルデューが参照している科学哲学の可能なかぎり全てを検討することが必要である。

また、ブルデュー社会学の射程と限界を正当に判断するためには、ブルデューが依拠する関係論的思考様式の批判的な検討も必要である。そのためには、関係論的思考様式だけを取り出して検討するだけでは十分ではなく、科学哲学の言説空間全体の中で、カッシーラーやバシュラールがどのような位置を占めているのかを鑑みなければならない。

以上のような限界を抱えている本稿は、未だ研究としては道半ばにあると言わざるをえない。しかし、ブルデュー社会学を「それ自体として、それ自体のために」研究するだけでは、逆説的なことであるが、ブルデュー社会学を正しく理解することができないということは示せたと思う。パスカルを理解するためにキリスト教の知識が不可欠であるのと全く同じように、ブルデューを理解するためには彼が前提とするものを理解していなけ

ればならず、いわゆる「内的読解」にとどまっているわけにはいかない。

それゆえ、ブルデュー社会学を批判的に検討し、その射程と限界を見極め、さらにはその応用可能性を問うためには、ブルデューが述べていることを文字通りに受け止めるのではなく、その源流にまでさかのぼって検討することが必要である。本稿が試みた科学哲学のみならず、ブルデューが高く評価しているフッサールやメルロー＝ポンティ、ヴィトゲンシュタインやオースティンなども視野に入れて検討する必要があろう。ブルデューのように、通常の枠にはまらない社会学者を理解するためには、彼を研究する者も通常の枠を超えて研究する必要があるはずである。

一　七〇年代から八〇年代初頭までは、日本の社会学者の中には、トーマス・クーンの『科学革命の構造』の中で提唱された概念を引き合いに出しながら、社会学における科学革命は機能主義によって実行されたと考えていた者が少なくなかった。例えば、新睦人ほか著『社会学のあゆみ』有斐閣、一九七九年、一四五頁。

二　前掲書の続編に当たる『パート2』では、通常科学としての基本パラダイムになるかに見えた機能主義への信頼が覆されたことが指摘されている。新睦人ほか著『社会学のあゆみパート2――新しい社会学の展開』有斐閣、一九八四年、二頁。

三　「むしろ社会科学はますます多様化してきていて、本書で私が「実証主義」および「理念主義」と名付けた諸「潮流」――本書で私はそれぞれの陣営から三つずつの諸潮流をえらんだが、もちろんじっさいに存在しているそれらの数はもっとずっと多い――が分離し論争しあっている、というのが現代の社会科学の最大の特徴である。」富永健一『現代の社会科学者―現代社会科学における実証主義と理念主義』講談社、一九九三年、一一頁。

四　「社会科学は、一七世紀～一八世紀から一九世紀初頭にかけての西洋で、その当時までにすでに人間知識の形態として十分確立され制度化されていた二つの学問群、すなわち自然科学と人文学とのあいだのいわば谷間に、この両者よりもおくれて店開きした、後発学問であった。」同右、二七頁。

五　「実証主義と理念主義の収斂は可能であろうか。社会学のように実証主義化の度合いがそれほど高度でない科学の場合には、収斂をめざす動きが起こりうる余地は今後ともあるであろう。しかし、「ドイツ社会学における実証主義論争」の経過が示唆するように、両者はそれぞれ相互にまったく異質な伝統をもっているのであるから、その違いが消滅していくということはないであろう。それらは対立しつつ、それぞれ自己の道を歩むだろう。」同右、五一四頁。

六　イマニュエル・ウォーラーステインも社会科学の分裂を問題とし、その解決を試みた社会学者である。特に、自然科学と人文学の間に社会科学が誕生したことに分裂状態の原因があるとする分析は、富永のそれと酷似している。それゆえ、ブルデューだけが特殊な問題意識を持っていたわけではなく、複数の学者によって共有されたものであったことになる。イマニュエル・ウォーラーステイン『入門・世界システム分析』藤原書店、二〇〇六年、二六頁。

七　ブルデューはこれら分裂した陣営に対して、他にも実証主義と理念主義、あるいは社会物理学と社会現象学など、多様な名辞を与えている。主観主義と客観主義の二元論については、例えばブルデュー『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待――ブルデュー、社会学を語る』藤原書店、二〇〇七年、二二九頁以下の議論を参照。

八　田原音和ほか訳『社会学者のメチエ―認識論上の前提条件』藤原書店、一九九四年や、

今村仁志ほか訳『実践感覚（1）』みすず書房、一九八八―一九九〇年を参照。

九　小松秀雄「ブルデューの認識論と実践理論の再考――技能・実践共同体・組織をキーワードにして」『論集』神戸女学院大学、四六巻三号、三九頁。

一〇　例えば、石井洋二郎『差異と欲望――ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む』藤原書店、一九九三年や、安田尚『ブルデュー社会学を読む――社会的行為のリアリティーと主体性の復権』青木書店、一九九八年など。

一一　例えば、清水強志「象徴権力論――ブルデューとフーコーの権力論の比較」松本和良ほか編『システムとメディアの社会学』恒星社厚生閣、二〇〇三年や、江原由美子「ジェンダーと構造化論――ギデンズ、ブルデューを中心に」江原由美子ほか編『ジェンダーと社会理論』有斐閣、二〇〇六年、南田勝也「ロック音楽の超越性と男性性――ピエール・ブルデューの相同性理論を基に」宮台真司ほか編『「男らしさ」の快楽――ポピュラー文化からみたその実態』勁草書房、二〇〇九年など。

一二　磯直樹「ブルデューにおける界概念――理論と調査の媒介として」『ソシオロジ』社会学研究会、第五三巻一号、三八頁や、磯直樹「『再生産』以後のブルデュー――一九七〇年代における三つの基礎概念の形成」『社会学史研究』日本社会学史学会、第三〇号、一二五頁などを参照。

一三　前掲、安田『ブルデュー社会学を読む』五頁。

一四　前掲、石井『差異と欲望』一五頁。

一五　ブルデュー『実践理性――行動の理論について』藤原書店、二〇〇七年、七頁。

一六　同右、七頁。

一七　同右、七―八頁。

一八　後述するように、『実践理性』以前に関係論的思考様式に関する言及が一切なかったわけではないが、この概念それ自体に関する説明は行なわれてこなかった。一九六四年の『遺産相続者たち』で注目を集め、一九七〇年の『再生産』に続き、一九七九年の『ディスタンクシオン』で社会学者としての地位を確固たるものにしたことを考えると、実に三〇年あまりの間、ブルデュー社会学の本質は暗黙のままにされていたことになる。

一九　加藤晴久訳『自己分析』藤原書店、二〇一一年、二一頁。

二〇　同右、二七頁。

二一　このことは、一九八三年にブルデューに対してインタビューを行ったハイルブロンは、なぜブルデューが、「カッシーラーとかバシュラールのような、普通、社会学者から無視されている哲学者」をしばしば参照するのかを問うていることからも伺える。ブルデュー『構造と実践』藤原書店、一九九一年、六八頁。

二二　頻出表現であるため、全ての箇所を列挙するわけにはいかないが、例えば、同右、一九八頁に確認できる。

二三　ブルデュー『芸術の規則（2）』藤原書店、一九九六年、一七頁。

二四　前掲、ブルデュー『構造と実践』六八頁。

二五　前掲、ブルデュー『実践感覚（1）』六―七頁。

二六　前掲、ブルデュー『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』一三〇頁。

二七　前掲、ブルデュー『実践感覚（1）』六―七頁。

二八　前掲、ブルデュー『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』一三一頁。

二九　前掲、ブルデュー『構造と実践』一九八頁。

三〇　P. Bourdieu, *Leçon sur la leçon*, Éd. de Minuit, 1982, pp. 41-42.

三一　前掲、水島『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待――ブルデュー、社会学を語る』一三〇頁。

三二　Bourdieu, *op. cit.*, pp. 41-42.

三三　前掲、安田『ブルデュー社会学を読む』五頁。

三四 同右、七頁。

三五 三浦直子「反省的社会学の生成――ブルデュー社会学における認識論の位置づけをめぐって」P.ブルデュー社会学研究会編『象徴的支配の社会学』恒星社厚生閣、七頁。

三六 磯直樹「ブルデューの『階級』分析」『社会学史研究』日本社会学史学会、第三三号、九四頁。

三七 同右、九六頁。

三八 前掲、磯「『再生産』以後のブルデュー」一三二頁。

三九 ブルデューとの語彙の対応関係を探るため、仏語訳の『実体概念と関数概念（Ernst Cassirer, *Substance et Fonction*, Éd. de Minuit, 1977）』を参照したが、少なくとも本稿において扱われている資料の範囲においては、「関係論的思考様式（le mode de pensée relationnel）」と「実体論的思考様式（le mode de pensée substantialiste）」という語彙は用いられていなかった。しかし、渉猟する資料の範囲を拡大することで結論が変わる可能性は否定できない。

四〇 事物概念（concept de chose）と関係概念（concept de relation）は、『実体概念と関数概念』における第一部の表題にもなっている。また、本文中でも頻繁に用いられているのはこれらの概念であるが、実体概念（concept de substance）と関数概念（concept de fonction）という表現が本文中に全く存在しないわけではない。カッシーラーは定義を行っていないため、それぞれの含意の違いははっきりしていない。

四一 カッシーラー『実体概念と関数概念』みすず書房、一九七九年、i頁。

四二 カント『純粋理性批判』作品社、二〇一二年、十頁。

四三 ボヘンスキー『古代形式論理学』公論社、一九八〇年、七頁。

四四 同右、一〇一―一〇二頁

四五 同右、一一頁。

四六 前掲、カッシーラー『実体概念と関数概念』i頁。

四七 同右、三頁。

四八 同右、九頁。

四九 同右、二四頁。別の箇所では、「関係概念の論理学」や「数学の論理学」という表現を見出すことができる（四三頁、六一頁、一五〇頁を参照）。それゆえ、「数学的関数概念の論理学」に関しても、カッシーラーの用語法は固定的なものではない。

五〇 同右、五頁。

五一 同右、六頁。

五二 同右、二一頁。

五三 同右、六頁。

五四 同右、九頁。

五五 同右、八頁。カッシーラーによれば、類概念の論理学はアリストテレス形而上学を前提とすることで成り立っている。感官によって外界を模写することで一貫性のある概念体系が得られるというのであれば、写し取る現実の中にあらかじめ一貫性が存在していなければならない。その一貫性を担保するのが、アリストテレスの目的論的世界観である。すなわち、世界を構成する事物はすべて、それらを構成するところの本質に応じたヒエラルキーを構築しているという思想である。

五六 同右、一三頁。

五七 同右、一七頁、四七頁。

五八 同右、四五頁。

五九 同右、二三頁。

六〇 同右、二三頁、二五頁。

六一 同右、六九頁。

六二 同右、二五頁。
六三 同右、三九頁。
六四 例えば、虚数や無限などの概念は直観による模写が不可能な概念の代表例である。その存在が容認されるのは、純粋な数学的系列においてのみである。同右、九七頁。
六五 同右、二〇頁。
六六 同右、一三〇頁。
六七 同右、一五五頁。
六八 カッシーラー『アインシュタインの相対性理論』河出書房新社、一九九六年、一九頁。
六九 前掲、カッシーラー『実体概念と関数概念』一七一頁。
七〇 同右、一三七頁。
七一 同右、一五〇頁。
七二 訳語は訳者によって安定していない。宮島は「社会学的認識の理論」とし（宮島、一九九一年）、田原と水島は「社会学的知識の理論」と訳し（田原、水島、一九九四年）、小澤は「社会学的認識論」と訳している（小澤、一九九五年）。日本では定訳が存在しないため、本稿は« theory of knowledge »と« epistemology »の二つを区別するため、前者は直訳的に「知識の理論」とし、後者を「認識論」と暫定的に訳すことにする。
七三 Bourdieu, *La reproduction*, Éd. de Minuit, 1970, p. 18.
七四 Bourdieu, *Le métier de sociologue*, Mouton de Gruyter, 2005, pp. 47-49.
七五 Bourdieu, « Structuralism and Theory of Sociological Knowledge », *Social Research*, XXXV, 4, 1968, pp. 681-682.
七六 Ibid. p. 682.
七七 Ibid. p. 682.
七八 前掲、カッシーラー『実体概念と関数概念』八三頁。
七九 Bourdieu, op. cit., « Structuralism and Theory of Sociological Knowledge », p. 682.
八〇 Bourdieu, « Postface », in Panofski, *Architecture gothique et pensée scholastique*, Éd. de Minuit, 1967.
八一 Bourdieu, *La distinction*, Éd. de Minuit, 1979, p. 587.
八二 前掲、カッシーラー『実体概念と関数概念』一六九頁。傍点は筆者による。
八三 Bourdieu, op. cit, *Le métier de sociologue*, p. 76.
八四 Ibid., p. 76.
八五 Ibid., p. 74.
八六 Ibid., p. 73.
八七 Ibid., p. 73.
八八 Bourdieu, op. cit., « Structuralism and The Theory of Sociological Knowledge », pp. 698-689.
八九 前掲、カッシーラー『実体概念と関数概念』一五〇頁。傍点は筆者による。
九〇 « It is in their totality, or, more exactly, in their mutual relations that such concepts represent their objects, so that their "necessary consequences in the sphere of thought" are always "symbols of the necessary consequences in the realm of things of the objects represented." », Bourdieu, op. cit., « Structuralism and theory of sociological Knowledge », p. 688.
九一 « The structure of symbols symbolizes the structure of relations established by experience in such a way that the relation between theory and facts, between reason and experience, is still a structural homology. », Bourdieu, op. cit., « Structuralism and theory of sociological Knowledge », p. 689.
九二 Pierre Bourdieu, « Postface. La noblesse : capital social et capital symbolique », in Lancien Didier et Monique de Saint Martin (sous la direction de), *Anciennes et nouvelles aristocraties de 1880 à nos jours*, Éd. Maison des sciences de l'homme, 2007, p. 387.